



桜の下で、幼なじみに

～卒業の春、初めての夜～

桜の下で、幼なじみに（体験版）

蜜夜文庫

〳卒業の春、はじめての夜〳

蜜夜文庫

【体験版】 本作の冒頭（第1話前半）を収録しています。

■ 第1話・前半（無料）

桜井結衣、22歳。大学を卒業した春。隣の家の幼なじみ・悠に、ずっと言えなかった「好き」がある。けれど彼は、東京へ発つてしまう――。「桜が咲いたら、ちゃんと言う」。二十二年越しの両片想い、清楚な初恋純愛。

第二話 卒業式の日

三月の風は、まだ少しだけ冷たかった。

桜井結衣は、卒業証書の入った筒を胸に抱えて、大学の正門をくぐった。四年間通った校舎を、振り返る。もう、明日からはここに来ることもない。そう思うと、嬉しさと寂しさが、胸の中で、ぐるぐると混ざり合った。

式のあいだ、結衣はずっと、隣の席の男の子のことを、横目で見ていた。

春日悠。隣の家の、幼なじみ。生まれた病院も同じで、幼稚園から高校、大学まで、ずっと一緒だった。背が高く、少しでも猫背で、笑うと目が細くなる。今日はいつものパーカーではなく、慣れないスーツを着ていて、それがなんだか、くすぐったかった。

「結衣」

式が終わって、人の波が引きはじめた頃、悠が声をかけてきた。

「一緒に帰ろ。……最後だし」

最後、という言葉が、結衣の胸を、ちくりと刺した。

結衣は、四月から地元の会社に就職する。悠は、東京の企業に決まっていた。つまり、この町で一緒にいられるのは、あと、ほんの数週間だけ。二十二年間、当たり前のように隣にいた幼なじみと、もうすぐ、離れてしまう。

「うん。帰ろ」

結衣は、なるべく明るく答えた。

二人で、いつもの帰り道を歩いた。大学から駅までの道は、桜並木になっていて、枝のつぼみが、うつすらとピンクに色づいていた。あと一週間もすれば、この道は、満開の桜のトンネルになる。

「なんか、実感わかないな」

悠が、空を見上げながら言った。

「もう学生じゃないって。ずっと、結衣と同じ学校だったのに」

「うん……。わたしも、変な感じ」

結衣は、筒を抱える腕に、少しだけ力をこめた。

本当は、変な感じ、なんて言葉では、足りなかった。もっと、切実だった。悠が東京に行ってしまう。それが決まった日から、結衣はずっと、胸のどこかが痛かった。けれど、それを、悠に言うことはできなかった。だって、言ってしまったら、この関係が、壊れてしまう気がしたから。

結衣は、ずっと前から、悠のことが好きだった。いつからかは、自分でもわからない。気づいたときには、もう、好きだった。幼なじみとしてではなく、一人の男の子として。

でも、その気持ちを、口にしたことは、一度もなかった。

幼なじみというのは、便利で、そして残酷な関係だった。いつでも隣にいられるかわりに、その一線を越えるのが、とても難しい。「好き」と言って断られたら、幼なじみですらいられなくなる。それが怖くて、結衣

はずつと、気持ちに蓋をしてきた。

隣にいられるだけで、いい。そう、自分に言い聞かせて。

けれど、その「隣」が、もうすぐ、なくなってしまう。

「結衣、覚えてる？」

桜並木の途中で、悠が、ふいに立ち止まった。

「小学生のとき、この川で、俺が溺れかけたの」

「……覚えてるよ。あんた、カエル捕まえようとして、落ちたんでしょ」

「そうそう。で、結衣が泣きながら、大人呼びに走ってくれて」

悠が、懐かしそうに笑った。その横顔を、桜のつぼみ越しの、やわらかい光が照らしていた。

「あのとき、思ったんだよな。あ、こいつがいなかったら、俺、死んでたなって」

「大げさ」

「大げさじゃないよ」

悠は、川面を見つめたまま、続けた。

「結衣は、いつも、俺の隣にいてくれた。当たり前前みたいに。……でも、それが、当たり前じゃなくなるんだなって、最近、やっと気づいた」

結衣は、息を止めた。

悠の声の調子が、いつもと違った。ふざけているようで、その奥に、何か、まつすぐなものがあつた。結衣は、どう答えていいか、わからなかつた。心臓が、うるさいくらいに鳴っていた。

「悠……？」

「あ、ごめん。なんか、湿っぽくなった」

悠は、慌てたように笑つて、また歩き出した。

「腹減つた。どつか寄つてく」

結衣は、その背中を、少しのあいだ、見つめていた。

今、悠は、何を言おうとしたんだろう。その先を、聞きたかつた。聞くのが、怖かつた。二つの気持ちだが、胸の中でせめぎ合つて、結局、結衣は何も言えないまま、悠のあとを追いかけた。

いつものように。

二人で、駅前の古い喫茶店に入つた。学生の頃から、何度も通つた店。マスターが「あら、二人とも卒業へおめでとう」と、コーヒーをサービスしてくれた。

窓際の席で、他愛のない話をした。四年間の思い出。就職してからの不安。共通の友達の近況。話しているあいだ、結衣は、悠の顔ばかり見ていた。この顔を、あと何回、こんなふうに近くで見られるんだろう。そう思うと、一分一秒が、惜しかった。

「なあ、結衣」

コーヒーを飲み終えた頃、悠が、カップを置いて言つた。

「東京行つても、俺、結衣のこと、忘れないから」

その言葉は、優しくて、けれど、決定的だった。

忘れない。それは裏を返せば、離れる、ということだった。会えなくなる、ということだった。結衣は、うつむいて、コーヒーの残りを見つめた。目の奥が、じんと熱くなった。

「……当たり前でしょ」

やつとの思いで、そう返した。声が、少し震えていた。

「幼なじみなんだから。忘れたら、承知しないから」

「はは、こわ」

悠が笑った。結衣も、笑おうとした。けれど、うまく笑えなかった。

このまま、幼なじみのまま、離れていくのか。好きだと言えないまま、悠は東京へ行ってしまうのか。そう思うと、胸が、張り裂けそうだった。

あと、数週間。

この、桜が咲くまでの、短い時間。それが、結衣に残された、最後の時間だった。

喫茶店を出ると、空が、夕暮れに染まりはじめていた。桜並木の向こうに、赤い太陽が沈んでいく。二人の影が、長く、道に伸びた。

「じゃあ、また明日」

家の前で、悠が手を振った。二十二年間、毎日のように交わしてきた、別れの挨拶。

「うん。また明日」

結衣も、手を振り返した。

悠の背中が、隣の家の玄関に消える。その戸が閉まる音を聞いてから、結衣は、自分の家の門の前で、しばらく動けなかった。

胸の奥で、ずっと言えなかった言葉が、疼いていた。

好きだよ。ずっと、好きだった。

その言葉を、桜が散る前に、言えるだろうか。言う勇気が、自分にあるだろうか。結衣は、色づきはじめて空を見上げて、小さく、ため息をついた。

その夜、結衣のスマホに、悠からメッセージが届いた。

——ここから先は、二人だけの、桜の夜です。❤️（有料パート…第1話後半〜第5話収録）

——続きは、製品版でお楽しみください。